

## 善意のループ —チェンマイの記憶—

名古屋高等学校 2年 川瀬 弘晟

「きれいなところだな。」

その美しい景色に心奪われた。

三年以上、僕らはコロナ流行下で学校生活を送った。学校行事がなくなったり、部活が制限されたり、遠くへ旅行ができずにいた。僕とさえばすっかり自宅で映画漬けの日々でまさに「のんびんだらり」と過ごしていた。

ある日見た日本映画の美しい景色。緑鮮やかな森の中にあるプール。そこはタイ北部、チェンマイのエイズ孤児の施設だった。映画のエンドロールに見慣れた企業名があった。僕がよく着る服の企業だった。調べてみると、エイズの偏見差別で公共プールに入れないう子供達のために社員達が立ち上がり、子供達のプールを作ったのだとわかった。「この景色を実際見てみたい」そう思った。

「チェンマイの施設に行ってみたいんだけど。」僕がそう言った時、母は最初目を丸くしたが、大賛成してくれた。海外旅行が解禁になった長期休暇に、僕は家族と訪問する予定を立てた。この時点で僕はただ、「訪問して寄付をすればよい」と考えていた。メールで施設に要望を尋ねると意外な答えが帰ってきた。「子供達の体操服がないのです。子供達の運動靴が足りないのです。」この要望を聞いた時、あのきれいな景色が二次元の映像でなくなり、僕を現実の感触にグンと引っ張った。僕は簡単に考えていた。「見学して寄付をする」、何てきれいごとだろう。そこには生きている子供やスタッフがいて困っている現実があるのだ。僕は親戚や周りに声をかけて学校や部活の体操服や運動靴をかきあつめた。段ボールに一生懸命詰め込んだ。実際たぐさんの段ボール箱を空路で運んだため、現地空港で違法な商売用と疑われたのには参ったが。

タイ北部チェンマイの郊外にその施設「バーンロムサイ」は建っている。日本人女性が設立した施設で、孤児院の隣をリゾートとして経営し、卒業生を雇用している。助けるだけでなく子供達が自立して生活していけるように、支える側も支えられる側も気持ちよく続いていけるようにとの願いがあるのだと聞いた。最初は支援に支えられてもその継続に苦勞する施設もあるという。この支援が輪になって続いていく仕組みはとても素晴らしいと感じた。職員から設立当時の苦勞や、コロナ流行で支援が滞り、何人かの子供を国立の施設に送らねばならなかったことなど話を聞かせてもらった。施設の学業を支えているタイ人の先生はとても穏やかな人だった。熱帯の気候のせいかな、森の木々は日本の緑より濃く鮮やかで、南国の植物は生き生きと繁っていた。映画に出ていたプールは、澄んだ水が日光をキラキラと反射して、映像よりも美しい光景だった。

「私も最初は宿泊客だったんです。」案内してくれた女性職員が教えてくれた。「でも今度はスタッフとしてここに戻ってきたんですよ。」と。善意のループがここにもあった。その時、美しい景色にふわふわしていた僕は、この現実にもまたグンと引き寄せられた。

僕は、恵まれている。平和な日本に生まれ、学業も趣味もでき、不自由なく暮らせている。僕は人に優しくありたいと思って生きてきた。善いことをやりたい、人の役に立ちたい、人を幸せにしたいと思っている。でも、僕の想いはまだまだ軽いのだと思う。僕はただの高校生で、まだまだ足りないものが多い。もっと世の役に立つ人間になりたいと強く思った。この体験は、あの緑鮮やかな美しい光景の記憶とともに、ずっと僕の心に残るだろう。

誰かの善意は回り巡って誰かに届く。僕がチェンマイにひかれたように。この夏、大学の見学に赴き進路を考えるようになった。いつか僕も善意のループの一部になりたい。大きなパーツでなくとも小さくても役立つ存在になりたい。この想いを実現できるよう今後の学校生活を送りたい。将来同じ想いの仲間にも出会えると思う。善意のループは広がり、僕らはそれを未来へ繋げていくはずだ。